

---

---

## シュルレアリスムにおけるオブジェの両義性

——「いざなうもの」から「人形」へ

河上春香（大阪市立大学）

---

---

本発表では、シュルレアリスム運動のなかで生まれたオブジェという概念が、チェコスロヴァキアにおいて人形というモチーフと出会い、独自の変遷を辿った過程を論じる。その際、観察者と被観察物という二項を用い、両者の主客関係の動態を検討することで、シュルレアリスムの文脈におけるオブジェ概念が持つ両義性と、その批評的意義を明らかにすることを目指す。

アンドレ・ブルトンらのテキストによれば、シュルレアリスムにおけるオブジェは、それを観察する者の無意識の欲望を開示するものとして考えられる。その過程には被観察物と観察者との相互的な交流がある。つまり、被観察物の機能と役割は観察者の欲望との関係において再定位され、同時に観察者の主体もまたこの欲望の開示を中心として再構成される。この意味でオブジェとは観察者の主体を新たな位置へと「いざなう」ものである。

チェコスロヴァキアのシュルレアリスト、インジフ・シュティルスキー(Jindřich Štyrský 1899-1942)の諸作品においても、オブジェは重要な役割を果たす。彼の絵画では当初キュビスム的なスタイルが踏襲されていたが、プラハにシュルレアリスト・グループが結成されて以降、《出生外傷》(1937)や《マヤコフスキーのベスト》(1939)といった作品において写実的な表現が用いられるようになる。ここに見られるモノの形態への関心は、1934年頃の彼の写真やコラージュとも呼応するが、そこにあらわれているのは彼の無意識の源泉たる夢と関連した「いざなう」オブジェであると言えよう。街角にこうしたオブジェを見出すシュティルスキーの写真作品からはしかし、観察者との関係においてオブジェがより踏み込んだ主体性を得る瞬間を垣間見ることができる。彼の写真は、しばしば絵に描かれた人物や人形といった人間の形象から発せられる眼差しをとらえ、それらのモノとしての状態を曖昧にし、生命の気配をオブジェに与える。この生命を持つオブジェ、そして「人形」というモチーフは、ヤン・シュヴァンクマイエル(Jan Švankmajer 1934-)の映像において、人間主体のパラドクスを暴露するものとして機能する。古い道具をパペットとしてアニメーション化した彼の映画『ヴァイスマンとのピクニック』(1968)では、オブジェは観察者としての人間に逆襲するものとなる。こうしてオブジェが「いざなうもの」から「人形」のモチーフへと推し進められる時、観察者と被観察物の間で、主体性と客体性は逆転現象を起こす。この意味で「人形」とは、人間中心主義を前提とした社会機構やイデオロギーへの風刺であると同時に、既存の意味連関を離れて得られた観察者の主体的自由が、あくまでも条件付きのものに過ぎないということを告げる、オブジェの裏の顔なのである。